



喜多焚

御旅社七夕祭のご案内

茶屋町の御旅社では本年も左記の通り七夕祭を斎行致します。

日時 平成二十六年七月六日〜七日

両日とも午後四時〜午後十時まで

内容 短冊奉納(各色一枚百円)

場所 大阪市北区茶屋町十二番五号御旅社

お問い合わせ 網敷天神社 御旅社まで

※雨天でも斎行いたします。

遣梅式

本年も七月二十四日午前十一時より、当宮と大阪天満宮と天神祭を通じて縁ある神事、「遣梅式」を斎行致します。この前後一時間ほど、神事の都合上、御旅社の参拝は階下までとなります事、何とぞご了承下さいませ。

梅田ゆかた祭

七月十九、二十日の両日、茶屋町、大阪駅、グランフロント大阪、ディアモール大阪の四会場で「梅田ゆかた祭」が開催されます。

茶屋町では両日とも午後四時から打ち水イベントがあり、日本古来の涼のとり方を実施し、また、グランフロント大阪のうめきた広場では盆踊りも実施されるなど小粋な街あそびが展開されるそうです。また、当宮御旅社では、地域活動の一環として、地域の方々やお子さん方が描いた風鈴を、この両日境内に飾り、風鈴の涼音を氏神さまに捧げます。この両日はゆかたで梅田を楽しみましょう。

氷の朔日

現代では、夏のお祭りの時には、屋台などでかき氷をよく目にします。暑い最中に食べる氷は実に格別です。しかしかつて、夏の氷はとても貴重なものでした。

「氷室」と呼ばれる天然の冷蔵庫に、冬の間に凍った氷を詰めて、それが溶けないように幾重にも塞ぎ、半年ほど経った夏にそれを取り出して、溶けないうちに市中に持つてくるという、大変な労力がかかるものでした。

この大阪においては、枚方市や高槻市の方に氷室という地名が残っており、往時はこのあたりから氷が運ばれていたと思われれます。

さて室町時代、そんな氷を氷室から取り出す日というのが旧暦六月一日(朔日)と決まっております、そこから氷の朔日と呼ばれました。

現代でいえば七月初旬前後にあたります。別名「氷室の節句」ともいい、取り出した氷を大急ぎで運び、各所に献上されました。

そんな氷の朔日ですが、実は江戸時代になるとある物語の題名になっています。その物語とは近松門左衛門の『心中刃は氷の朔日』というお話で、鍛冶屋の弟子平兵衛と遊女小かんの心中事件をもとに、宝永六年(一七〇九)六月に初演された物語です。二人の心中した日が氷の朔日の旧暦六月一日だった事からこの題名がつけられたようです。

実はそんな二人が心中した場所というのが、当宮の氏地である「北野村の藍畑」であり、現在の大阪市北区免野町の南西付近でした。この時代、すぐ近くで「曾根崎心中」も起こっており、情死する者が多かったようです。

当時は現代とは違い恋愛も不自由なもので、様々な要因から結ばれるには心中以外無い場合もありましたが、現代では貴重だった氷もいつでも食べられ、恋愛も自由である事に先人たちの積み重ねの上に今の私達がある事と思いを致したいものです。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

